

酒造出稼ぎと村・家・個人

—農業・農外労働セット化の一試論—

滋賀県立琵琶湖博物館 矢野 晋吾

本研究は日本において伝統的に行われてきた出稼ぎ労働の分析を通じて、日本社会における労働の社会的性格の一端を明らかにすることを射程としている。

従来の研究、とりわけ日本農村社会における労働研究は、画一的な歴史観や当事者の文脈を等閑視した視点など、課題を孕んでいた。そこで本研究は現実に労働の主体として行為を行う人間の視点から、労働観の再検討を試みたい。

鍵としてとりあげたのが「出稼ぎ」である。「出稼ぎ」は、労働力移動の一形態であり、生業複合を前提にして移動を伴い、母村・就業先などとの社会関係を形成している。研究史で封建制から脱した契機とされる農民の賃労働化を孕みながら、伝統的に日本の広範囲で存続してきたという特徴をもつ。

事例としては八ヶ岳南麓の高冷地集落・長野県諏訪郡富士見町瀬沢新田区の酒造出稼ぎをとりあげ、個人、家、村落の3つの位相から社会的性格とその経時的变化について考察した。

個人の位相では、出稼ぎに出ることが社会規範に組み込まれ、伝統的に農業とセット化していることが明らかになった。出稼ぎに対する評価も本人、周囲とも積極的なプラス評価で、逆に出ないと否定的な評価を受けた。ライフステージによっては通過儀礼的側面も付加されていた。

家・家業経営との関連では、一つの家を取り上げて、家員のライフステージごとに、各時代の生活環境に照らしながら家業経営等の労働力構成について分析を行った。

ここでは、出稼ぎをセット化した世代間分業、性別分業によって家業経営が成立している状況が明らかになった。また、経済的にはマイナスになる「村づとめ」に積極的に関与している状況がみられ、家業経営が時にその効率性よりも「村落」との関係性を重視した形で行われていた。

村落との関連では、出稼ぎ先での地位・威信が村落内のそれと強く関連し、行動の選択にあたっては、経済的要因に加えて社会的、文化的要因が強く作用していた。村落システムも、出稼ぎをセットして展開してきた。

当地の事例では、一個人が行う労働という行為は、家、村落など当事者を取り巻く社会構造の中に埋め込まれていた。厳しい自然環境のなかで、自ら積極的に出稼ぎに取り組む村人たちは、出稼ぎという賃労働を積極的に自らの生活に融合させ、プラスに転じる村落システムを創造し、維持してきたのである。

この事例のように農林漁業労働と他の労働をセット化する仕組みは日本社会において、特殊な事例ではなかったのではなかろうか。農民個人、家、村落は、多様な生業を状況に応じて自在に取り入れ、セット化する。極めて柔軟性に富んだ構造をもっていたのである。